

(様式第 1 号)

令和 6 年度 第 3 回総合教育会議 会議録

日 時	令和 7 年 3 月 2 7 日 (木) 13:30～15:30
場 所	市役所本庁 北館 4 階 教育委員会室
出 席 者	高島市長 野村教育長 河盛教育委員 極楽地教育委員 森川教育委員 三宅教育委員
司 会	柏原企画部長
事 務 局	柏原企画部長、萩原教育部長、山本学校教育担当部長、伊藤市長公室長、 田嶋国際文化推進室長、田中政策推進課長、高橋スポーツ推進課長、 長岡管理課長、渡邊社会教育推進課長、浅田学校支援課長、 下條管理課長補佐、内野政策推進課係長、正好政策推進課員
会議の公開	■ 公 開
傍 聴 者 数	5 人

1 会議次第

- (1) 開会式
- (2) 議題 1 芦屋市における中学校部活動の地域展開について
- (3) その他

2 提出資料

- (1) 部活動の「地域展開（地域移行）」と新たな地域活動
- (2) 芦屋市の部活動の位置づけについて
- (3) 芦屋市部活動の地域展開について

3 審議経過

(柏原企画部長)

ただいまから令和 6 年度第 3 回総合教育会議を開催いたします。

本日は、兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授で、本市の中学校の休日部活動の地域移行推進会議の委員長を務めていただいております、森田啓之先生をオブザーバーとしてお迎えをしております。議事冒頭では、国の動向、他市の状況などを解説していただくこととしております。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、市長より開会のご挨拶をお願いします。

(高島市長)

こんにちは。今年度の最後の総合教育会議ということでお集まりいただきありがとうございます。また、森田先生もご多忙のところ、お越しいただきありがとうございます。

半年ほど前の、令和6年度第1回の総合教育会議の際には、生成AIが発達し生活に身近になる中で、どういったことが学校に求められるのか、学校の意義・役割は何かということを改めて問わなければいけないのではないか、という話をしました。この半年でも時代は大きく変わっていると思います。やはり改めて、人が教えるということにどういう価値があるのか、学校という場にどういう価値があるのか、ということをみんなで考え、学校の存在意義に思いを馳せないといけない時代に差し加かってきているのではないかと思います。

私事ですが、中央教育審議会の委員となり、学習指導要領の改訂にも携わることになりました。そこでも、改めて学校の意義ということを考え直さないといけない、ということを議論しているところです。今日のテーマの「部活」というのも、人を教えるということは結局何のためにあるのか、部活で身につく力、魅力、能力、資質は何かというところを改めて問わなければいけないと考えています。そういった本質的な議論もできればと思っていますので、ぜひ森田先生はじめ、忌憚なきディスカッションができればと思います。よろしくお願いいたします。

(柏原企画部長)

ありがとうございました。それでは、これより議題に入ります。本日の議題は、「芦屋市における中学校の部活動の地域展開について」です。

本日の進め方ですが、大きく2つに分けて議論をお願いしたいと思っております。まずは議論に先立ち、森田先生より国の動向、他市の事例、部活動の意義、制度移行に向けての重要な点などを解説いただきます。森田先生への質疑の後、担当課より、これまで取り組んでまいりました本市における部活動の位置づけ、現状を報告し、総括を行いたいと思います。

次に、地域展開に向けてのこれまでの市の取組状況、協議経過報告と今後の進め方について議論をいただきます。

それでは早速ですが、森田先生より解説をいただきます。

よろしくお願いいたします。

(森田教授)

よろしくお願いいたします。

まず、資料タイトルの「地域展開（地域移行）」についてですが、部活動の地域展開に関しては、当初「地域移行」と表現されていましたが、最近国も「地域展開」という表現に改めているところですので、このように表記しています。もう一点は、「新たな地域クラブ活動」という表現にしようかとも思いましたが、「新たな地域活動」と表記しています。

では、2枚目です。今日の内容は3点あります。

1点目は、国の動向の部分を含めて、この今回の改革の部分の背景についてで

す。端的には、これまでのいろいろな経緯はありつつも、今の時代に制度の維持は難しいということです。

2点目は、先ほどもありました「地域連携」「地域移行」や「地域展開」というワードについての理解、必要性についてです。

3点目は、これからの地域でのクラブ活動で、どのような展望を抱く必要があるのかという辺りをお話できればと思います。

今回のお話は、入り口は部活動ですが、恐らく市の生涯学習や社会教育という分野についても、これまでの施策をいい意味で変えていく、あるいは刷新するいい機会ではないかと私は捉えていますので、その辺りをお話できたらと思います。

では、3枚目をお願いします。

教育委員の皆様はご存知かと思いますが、部活動は長らく歴史があるものですが、「教育課程外」の活動で、あくまでも時間割にはないものだということです。そのため、部活動に関わることは、生徒はもちろん、先生においても任意だということです。ところが一般的には、部活動というのはみんながやるもの、あるいはやらねばならないものだとして認識されがちで、先生の中にもそういった捉えをしている方もいると思います。ポイントは、課外活動であり、時間割に組み込まれたものではないが学校教育の一環としてやっていくように示されており、また、自主的・自発的な参加というふうなキーワードがよく出ていることです。平成29年の改定では、「持続可能な運営体制」なんていう言葉も出始めて、国は、2000年頃から、もうこの状況を憂いていたことは事実だろうと思います。

4枚目に移ります。資料にもあるとおり、現在は「改革推進期間」にあたります。昨夏には「2026年度からは平日でも推進」という言葉も出てきました。それと同時に「地域移行」という表現は誤解を招く恐れがあるということも含めて「地域展開」という用語に改めていきました。

一番下に書いているとおり、今回のこのような数年間の動きというのは、突然出てきたものではなく、もうずっと論じられているものです。これまで部活動を地域に委譲していくような取組は、1970年代の「社会体育化」、続いて1990年代後半から2000年の「総合型地域スポーツクラブ」、兵庫県でいえば「スポーツクラブ21」のようなものを受け皿にしながら新しい展開に取り組んでいましたが、いずれも全国的にそれが認知されたり、浸透してはこなかったというのが正直なところです。今回は3度目の取り組みで、後戻りはないということを国ははっきりと決めています。

続いて5枚目ですが、少子化や価値観の多様化等を含めて、従来の子どもたちのニーズに十分に対応できないことが出てきたということ、また、先生に限らず世の中自体の働き方に対する課題があるということが、この改革の背景だと御理解ください。

一方で、6枚目には、長い歴史があるものを学校は手放していいのか、あるいは学校に置いておくべきじゃないのかという主張をされる方々の論点をまとめました。最近よく社会教育の中でも「居場所」という言葉が出てきますが、これはいわゆる学校になかなか行きづらい子としての居場所が大きな意味だと思いま

す。また、授業以外で存在を発揮する場となっていることも「居場所」の意味には含まれるかもしれませんが。ほかにも、「日常性」と連動して学校の先生が指導する意味合いや、費用が抑えられること、保険の問題などが挙げられています。

他方、生徒からは様々な指摘も出てきます。7枚目の4点目ですが、様々な市町がアンケートをとっているなかで、その回答でみられる傾向としては、生徒は大人が思うよりも、部活動中心の生活を望んでいるわけではないということです。具体的には、約3割の生徒は部活動を生活の中心に置いている一方で、ゆったりとした取り組みを希望している生徒も3割以上います。かつては部活動から競技選手を目指すような共通の価値観がありましたが、現在の部活動はその装置や位置づけではない、ということが子どもたちの中でも認識されつつあることは重要であると思います。

続いて、8枚目です。部活問題は長年解決ができていません。時間の制限や、外部指導員、部活動指導員を入れるなど、対症療法的な改善はありましたが、根本的には解決しておらず、現場の問題としては肥大化しています。また、日本人の意識の中にも従来の部活像が浸透しています。学校教育としての本分にのっとった素晴らしい運営をしている方もいらっしゃいますが、一方で、活動が学校の範囲を逸脱していないかという懸念もあります。そして、その結果として、試合での勝利やコンクールでの入賞等が表面化し、そちらが大きく報じられることも含めて、部活問題というのはどこかで判断をしないといけませんし、トップダウンの政策が必要とも考えています。

部活動の改革は待ったなしの状態になっていますが、やはり10枚目にあるような根強い意見もあります。今の学校の先生が多ければ週5日、週11時間以上活動しているものを「地域移行」とし、地域に丸投げするのかなというような批判も多いですが、国も今の部活動を単に地域に水平移動してやってもらうことは考えていないということです。だからこそ「地域展開」という言い方に変更したということです。

11枚目のように、大変だけれども何とか学校の先生に世話になることはできないのか、という意見もあります。しかし、社会全体が家庭や健康を犠牲にして働く状況を問題視しており、それは教員の働き方にも当然出てきています。賃金を払うこととし、先生にお願いをしているという自治体もいくつかありますが、勤務時間そのものを見直す必要があり、継続させることは難しいと考えます。

そういう意味では、12枚目にありますが、誰もが無理せず支え合える体制として、地域移行・地域展開を考える必要があります。学校や自治体によっては部活動を一切しませんというところも出てくると思います。一方で、学校では生涯学習として、学校が許せる範囲の保障できる場をどうつくるべきかということを考えてもいいかなと思います。そういう意味で「誰もが無理せず支え合える体制」と書いています。

14枚目の図をご覧ください。従来の学校での部活動は左側の水色枠の中にあてはまります。学校の管理下・管轄の中にあるので事故が起これば、学校が、管理職が、当該顧問が責任を問われます。その下の緑の枠囲みについては、「地域連携」という形で、地域の方が指導員として入ったり、大学生の力を借りて実施する形です。これにより、先生の負担は少し軽くなるかもしれないですが、水色

枠の中にあるので、学校の管理下に置いている部活動という形です。

その右は、休日のを想定した「地域クラブ活動」というものです。地域で活動するため、法律上は社会教育としてのスポーツ・文化芸術活動にあたります。分かりやすく言えば、小学校の段階でスポーツ少年団や合唱団などに入っている場合のようなイメージで、保護者と所属先が直接やり取りをしている形です。この形は、小学校であればこれまで普通に行われてきましたが、中学校になると、保険の問題や、部活動が手厚い形で行われてきたので、そこをどうするかという議論は当然出てきます。そして、「学校部活動」から「地域クラブ活動」に転換するには、発想を根本的に変えないといけないと思います。

国は「学校部活動」から、無理がないように「地域連携」へ転換し、最終的に「地域クラブ活動」へ転換していく形でもよい、としており、それをどんどん広げていこうとしているところもあります。最終的には「地域クラブ活動」へ展開することを前提として「地域連携」を進めるならいいのですが、「地域クラブ活動」への展開を目指さない「地域連携」の形を増やしたとしても学校教育の管理下で行われている活動であることに変わりはありません。また、顧問の先生がフリーになったとしても、学校の管理職は責任を持たねばならないというふうになっていくだろうなと思っています。

それを示したものが１５枚目です。「地域連携」と「地域移行・展開」の違いを記載しています。

１６枚目も同じような形で、それを示していますが、「多様な体験機会を確保、単なる水平移行ではない」と書いています。いまある部活動をそのまま地域につくるとかそういった形だけではなくて、例えば、サッカーをしている子が違う文化活動、スポーツもやってもいいというようなことになるので、ここは生涯学習として再構築する必要があるかなというふうに思います。

続いて、１７枚目では、いろいろな形の地域クラブ活動があることを示しています。ご存知の「コベカツ」という神戸の仕組みは、地域クラブ活動として広く募集をして、民間や大学生の有志がつくったサークルのようなところに中学生が入っている等本当に様々です。実施をするのは有志の団体だとしても、それを統括する、あるいは運営の全体をマネジメントするような組織が必要なのではないかということを国はイメージしています。というのは、それぞれが勝手気ままにやって、少し望ましくないことが出てきたときに、コントロール・指導する部署・部門、団体が必要だということがあります。②－１は、兵庫県では一番有名な「総合型地域スポーツクラブ」で、播磨町では「スポーツクラブ２１」が町からの委託を受けてそれを行っています。町は委託元として関わっています。神戸市は、①型の形をとる市区町村で、当面の間は生徒指導課が窓口になっていると思います。ただ、今後どのようにしていくのかというのは今市町で悩んでいるところです。社会教育なので、自立を促したいというところもありつつ、どこまで市が全ての面倒見るのか、検討をしている状態です。

１８～２０枚目についてはお目通しください。「移行」という言葉から「展開」という言葉へ変更されていった理由について記載しています。「移行」だの一つの部を一つのクラブに移すといったこともありますがそうではなく、新しいクラブをつくらないといけないということでもなく、今あるところでもいいし、

地域でのいろいろな展開の可能性があるというふうに捉えてください。

21枚目が一番重要であると思います。私たちにとっても、そして多くの子どもにとっても部活動にはいい印象もありますが、一方では陰の部分もあることを冷静に見たうえで、地域での実践を広げていかないといけないと思います。意外と学生たちは、ここに記載のあることを部活動に感じているようです。自主的・自発的な活動であるはずなのに、顧問・先輩の了承を取らないと休めないという矛盾などが起こっています。独特なこの雰囲気を打開した新しい文化スポーツ活動の雰囲気を、この機会につくる必要があるのではないかと考えています。

22枚目について、コメ印の部分をご覧ください。今後学校が本来果たすべき役割・業務は何なのかというところになります。部活動はオプションであるにもかかわらず、オプションのところを頑張り過ぎて、先生の授業研究やその他の活動に対する時間が奪われてきたことは事実であると思います。本来果たすべき業務というのとは何なのかということも含めて、そちらに集中するべきであると思います。

地域展開してからもかかわる希望のある先生方は、1人の会社員と同じように地域人として活動に関わっていくような形で考えるべきだろうと思います。地域の人が少ない場合は、学校の先生や役場の方などに頼ろうとしているところもありますが、それらにおいても同じ考え方です。

23枚目です。他人事でいろいろなことを言っている人が多いですが、すべての大人が地域に根を下ろし、地域の現状を踏まえて自分事として考え、子ども自身も考えて、場を与えてあげれば、正解というものはないので、何らかの答えは出てくるかと思っています。

24枚目にありますように、学校教育という枠組からは少し外れますので、行政としては社会教育とか生涯学習という中に、これまで抜けてきた中学生期の活動をどのように組み込んでいくかという話が必要かなと思います。

25枚目については、先ほどからこだわってお伝えしていますが、今の部活動とは異なる新しいものを作るべきです。子どもとの関わり方や、活動時間・回数も柔軟に展開できるといいと思います。今まで公民館などが展開してきた教室なども、子どもたちにも提供できるものが多々あると思いますが、これまでは部活動があったことで、そういった情報は見たとしても頭に入らないし選択肢にも上ってこなかったと思います。そこにこれから中学生が入ってくる可能性もあるというふうに捉えてもらうといいかと思っています。

26枚目に関しては、実施主体として手を挙げてくれる団体はあると思いますが、運営組織をどうするかということは今後検討する必要があるかもしれません。ずっと市が窓口とか、統制をしていくというのものもあるかもしれないですね。

27枚目では、行政が今後すべきこととして、人材確保・団体確保と記載しています。

28枚目です。スポーツ資源として、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」とよく言いますが、その中でやはり、お金の問題が懸念点です。基本的には生涯学習として受益者負担という考え方になっていくわけですが、民間の営利企業の教室とは違う形となるように実施団体をどのようにサポートをするのか、検討が必要で

す。

29枚目です。芦屋市を含めた阪神間の自治体の話を記載しています。平日は学校の部活動を当面残して、休日だけ地域展開というところもありますが、そのやり方には問題も起こっています。平日と休日の指導者でぶつかり合うことや、遠慮してしまう部分があるということです。「子どものために一緒に連携しよう」と進めていけたらいいですが、残念ながらそううまくはいきません。それも踏まえて、最終的な判断はそれぞれですが、私はできるだけ、平日と休日の両方で地域展開をした方が前向きに進められるのではないかとお伝えしています。

おわりに、3点記載しています。

1点目は、部活動やスポーツ・文化活動の価値観を変える必要があるということです。

2点目は、まちづくり等を絡めた地域の力が試されると思います。地方へ行くと地域には高齢者ばかりでこのような展開はできない、という意見も出てきますが、できることが0ではないので、できることをやるしかないと思います。地域によって色々な差が出てくるとは思いますが、大人が子どもたちに意見を聞きながら、また、大人ができることは何なのかということを誠実に議論して考えることが大切だと思います。

最後に、学校として放課後活動を今後全部ゼロにするのかという点も並行して考えていかないといけません。この点をどう捉えるかがすごく重要だと思います。既に新たな取り組みを始めている学校もあります。特別活動のカリキュラムを外に広げたような自由参加の放課後活動の形です。先生も今までとは違う発想で指導をするので、熱意が必要ですが、負担になり過ぎないようにと意識をしながら進めているそうです。この辺りも、ぜひ考えていただけたらと思います。

説明は以上です。

(柏原企画部長)

森田先生、ありがとうございました。

それでは、委員の皆様におかれましては、先生にご質問、または確認したいという事項がございましたら、よろしくお願いします。

(河盛教育委員)

2週間ほど前の新聞に、中学部活動について3名の識者が語るというものがありました。静岡県掛川市が、地域展開を全面的に実施しており、熊本県熊本市が地域連携を進めていく、と。全国的に見ると、地域展開を進めたいけれども現実には難しいと諦めている自治体が非常に多いということが出ていました。兵庫県下は、阪神間も含めて、地域展開をするという方向にかじ取りをしているところが多くなっているようですが、実現可能なのでしょうか。考えたうえでの決断なのか、もしくは隣の市がするからやろうという形で進んでいるのでしょうか。

(森田教授)

様子見をしていた自治体さんの中には、急に決断を迫られたところもあります。自治体によって対応は様々ですが、県教委を含めて話をしている中でも、地

域展開に進む中で課題を克服していくほうが前向きでいいのではないかという話はしているので、兵庫県に関しては、その方向で揃っていくと思います。

（河盛教育委員）

地域に展開しても、実際には学校の施設や設備を使用せざるを得ないところが多くあると思いますが、そのときに父兄だけではなくて市民全体に地域展開をしていることを相当広くアピールしないと、いままでと同じと思われる可能性が十分あるので、そこをいかに周知するかも大事だと思います。

（森田教授）

おっしゃるとおりです。自治体の中には、市民・教職員への説明や文書配布を丁寧に行い、2年間の間でいろいろな絵を描き、モデル的に実施をして、平日・休日の点などの方針を変えたところもあります。人間の意識を変えることはなかなか難しいので、その過程と目標の期限とをはっきり市民も含めて子どもたちにも共有した上で、やれることはやっていくほうがいいと思います。

（河盛教育委員）

国の財政支援などはあるのでしょうか。

（森田教授）

今はモデル事業とか実証事業という形で、手を挙げた熱心なところにはいろいろな支援をつけていますが、それが未来永劫続くとは思えないですし、それでは自立はできないなと思いますね。社会教育や生涯学習という形の枠組みになると、一層、市町によって予算の差が出ることも考えられると思います。

（森川教育委員）

現在の部活動は学習指導要領上、学校教育の一環という位置づけがされているということですが、今後の地域クラブ活動が社会教育としてのスポーツ・文化芸術活動となるのであれば、地域クラブ活動に展開することによって、指導要領上の記載はなくなるという方向性なのでしょうか。

（森田教授）

今そこが教育課程審議会でも議論になっていると思いますが、私は恐らく一環という言葉はなくなっていくと考えています。一環というのは「一つの環の中にある」ということになります。課外であっても学校が面倒を見るという意味になりますね。今後、学習指導要領に、地域のクラブ活動と連携をするといったことは残っていくと思いますが、「学校教育の一環」という表現は、おそらく消えていくのではないかと予想はしています。

（森川教育委員）

分かりました。ありがとうございます。

（極楽地教育委員）

保護者委員で入らせていただいておりますが、先生のお話にもあったとおり、今の部活動でも、平日と休日の指導者が異なることで思いがぶつかるということは正直お聞きしてしまっていて、私は平日と休日はやはり同じ指導者で、先生方も一緒に見守ることが一番大事かなと思っています。方向性を決めることは芦屋市にとって大きな決断だったと思いますが、これは今後の方向性としては間違いないと先生のお話を聞いて思いましたので、このまま前に進むべきだと思っています。ただ、保護者の方や子どもたち、地域の方からも不安の声がたくさんありますので、対話と熟議が必要な事案だと思います。決定事項の説明や発信だけではなく、いろいろなご意見があるからこそ課題や懸念点を検討し、皆さんの意見を聞いて折り合いをつけるという案件だと思います。芦屋市は、これから令和8年度・9年度に向けて進めていくわけですが、統括する部署や、コーディネーター的な立場の方が必要であると思います。今、学校支援課、社会教育推進課とスポーツ推進課の3課が連携いただいておりますが、物理的な距離感や、もともとの事務分掌をお持ちなので、業務がプラスオンされていることがとても心配です。職員の方のワーク・ライフ・バランスが守れていないと私は外部から見て思いますので、その辺り、ほかの市はどう進められているのか、お伝えいただきたいと思っています。

（森田教授）

複数課で関わっているところもありますが、来年度から、完全に独立させて推進室等の部門を作っていこうとするところも聞いています。

（極楽地教育委員）

阪神間では、西宮市・三田市には独立した課があると聞いています。文科省の協議会、教育委員同士の研究協議会などでも他市の例を聞いてみると、2～3万人規模ぐらいのほうが進みやすいのかなと思っていて、芦屋は9万人都市と一番難しい規模なのかなとは思いますが、ただ私は課や専任担当者は必要だと思っていますので、お願いしたいと思っています。

（森田教授）

部活動の地域展開については、教育策ではなく、まちづくりの問題として捉えて市民や関係者に話をしていく必要があると思います。

それと先ほど話題に挙げた平日と休日の指導者の違いについて、1人で面倒をみるというシステムは、囲い込みやハラスメントの問題が出てくるので、できるだけやめたほうがいいです。複数の人が対等に無理をせず、情報共有しながら子どもたちに関わるというシステム・団体にしないといけないと思います。県下でクラブミーティングをしたことがあります。同じ学校でも部活動毎に活動方針や運営方法が異なっていたり、他の部活動の活動内容を知らなかったりしたことがあります。学校教育なのであれば、同じ基準で活動をさせないといけないと思いますが、そういったところも、この曖昧なシステムがずっと続いてきたからこそそのよくない部分だと思います。

(柏原企画部長)

先生、ありがとうございました。

引き続いて、「本市の部活動の位置づけと総括」について、担当課よりご説明をさせていただきます。

(浅田学校支援課長)

学校支援課の浅田と申します。

担当課からの説明は2回に分けて行いますが、まず1回目のほうは、部活動の現状及び総括について説明します。2回目は、本市の地域展開の取組を説明させていただきます。

資料2ページをご覧ください。芦屋市における部活動の意義を記載しています。資料の3ページ及び4ページには活動の様子を掲載しています。

続いて5ページをご覧ください。部活動を円滑に進めるためには、しっかりとした体制の整備が必要だと考えており、芦屋市では部活動の方針の策定、併せて部活動を支える環境の整備及び指導体制の確立に取り組んでまいりました。

次のページの写真は、外部指導者を活用した部活動の様子の一例です。顧問はサッカー競技を専門としていますが、バレーボールを専門とする大学生が指導に携わることで、充実した活動が行われている様子を表しています。

7ページをご覧ください。芦屋市の部活動の現状をご説明します。市内の3中学校の生徒数は1,538名、そのうち1,241名が部活動に参加しており、入部率は約80%です。部活動の数は40部活動あり、全ての部活動に教員が顧問として携わっています。また、外部コーチと言われる外部指導者・部活動支援員も配置されています。部活動支援員は国の事業として実施され、事業費は国や県からの補助を受けています。外部指導者は市の事業として進めています。

8ページをご覧ください。部活動数の推移です。部活動数は減少傾向にあり、平成14年から令和4年の間で8部活動が減少しました。主な理由は、生徒数の減少に伴い部員が集まらずに活動できなくなったことです。

次のページをご覧ください。生徒数の減少について、もう少し詳しくお伝えします。緑の枠で囲んでいる部分にご注目ください。令和6年度の中学1年生は462人ですが、これは1年前の小学校6年生698人のうち、約66%が市立中学校に進学している結果です。これに基づいて計算すると、令和12年の594人を進学率約66%で考えたときには、人数が392名になり、現在の人数から70名の減になるということが予想されます。現在でも、なかなか部員数が集まらずにチームが組めないという課題がありますが、これが今後顕著になっていくことが予想されます。次のページをご覧ください。

中学生の1・2年生を対象にアンケートを取り、子どもたちの気持ちの確認を行いました。662人の回答があり、回答率は67%でした。学校の授業の中で取り組んでくれたということで高い回答率をいただきました。

アンケートの結果についてご説明します。まず、Q1は「部活動に参加してよかったこと」の数値を示しています。Q2は「現在あなたが所属している部活動の満足度」を4段階で表しています。Q3は部活動に参加していない子どもたちのみを対象とし、「学校部活動に参加していない理由」を回答いただきました。

Q4「部活動の取り組み方について」では、1つの種目や協議に集中したいと答えた子どもたちが41%で、興味のある複数の種目や競技を行いたいと回答した子どもたちは57%でした。

15ページからは結果の分析になります。部活動に対して「非常に満足している」、もしくは「満足している」と回答をしている生徒が多く、80%を超えています。部活動に参加してよかったことでは、半数以上の生徒が、クラス以外の友達や先輩・後輩と関わる事ができた、人間関係を築く事ができた、自分の好きな活動に取り組む事ができた、努力の大切さを知った、と感じているところです。

ただ、次ページのように、部活動に対して約15%の生徒が満足していない状況もあります。また、部活動に参加していない理由として、学校外でスポーツや文化的活動を行っている生徒や、自分の時間を大切にしたいという生徒もいます。一方で、興味が持てる活動がないといった理由を挙げている生徒もいます。参考として、現在の部活動になく生徒たちが取り組みたい活動の上位5位ということで、調理・バドミントン・eスポーツ・ダンス・水泳と並んでいます。また、興味のある複数の種目や競技を行いたいという生徒も全体の約6割を占めるという結果が出ています。

資料の17ページですが、これまで学校が大切にしてきた部活動の意義やアンケートの結果を踏まえ、地域展開に引き継ぎたい理念として、

- 1 学年や学級を超えた交流を促進し、様々な年齢層と触れ合うことで多様な価値観に触れる活動にする。
- 2 自分で活動内容を選択し、自分のペースで参加できる活動にする。
- 3 活動（体験）を通して、成長が実感できる活動とする。

という3点を地域展開へ引き継ぎたい理念として示させていただきました。説明は以上です。

（柏原企画部長）

ありがとうございました。

それでは、意見交換に移らせていただきます。市長お願いいたします。

（高島市長）

よろしくお願いします。

この後に、今後の進め方の話はしますので、ここでは「部活動の位置づけや総括について」に対するご意見や、大きな方向性の話を主にお話できればと思います。

（河盛教育委員）

現在の部活動評価について、参加されている方の満足度が高いというのはすごく評価されるべきだと思います。85%が満足しているわけですから、非常に評価が高いと思います。ただ、例えば精道中学校は陸上部に入っている方が100名以上おられますが、潮見中学校には陸上部自体がありません。満足していると言うけれども、例えばある地区には陸上したい人ばかりいて、ある地区にはいな

いということはある得ないので、生徒の皆さんは学校にある部活から選んで、そこで頑張ったということなのでしょうね。そこで頑張って満足しているのだからいい、という評価ももちろんできると思いますが、実際には、本当は陸上がしたくて陸上部に入りたかったけれども、無かったから仕方がなく別の運動部に入ったという人と、そうでない人とは、本当の満足度は相当違うはずです。これは運動部でも文化部でもあると思います。今度、地域展開に変えるのであれば、そういうことはかなり解消される可能性は十分にあるので、そういうところを考えてやっていただきたいと思います。

また、取り組みたい部活の1位に調理というお話がありましたが、このことは以前に新聞にも載っていました。希望する部活動の1位か2位が調理でした。びっくりしたのですが、芦屋市でも同じ結果だったのでさらに驚きました。今回はこういう結果でしたが、何年かおきにやればまた順位が変わってくる可能性があると思うので、せっかく地域展開をするのであれば、こういう調査を定期的にしたほうがいいのではないかと思います。

（高島市長）

ありがとうございます。

85%という数字の内訳と言いますか、入学時に本当はあったらいいなと思っていた部活に入部できた場合を想像して、その場合と比較して満足かどうかということではないと思いますが、教育委員会として何か調べたりしているのでしょうか。さすがにそこまでは分からないという状況でしょうか。

（河盛教育委員）

本当にやりたい部活に入れて満足している人と、本当は違うことをしたかったけれど、入ったらそれなりに頑張れたし楽しめたから満足していますという人を、同じような評価をしていいのかなということがあります。

（高島市長）

難しいですね。私も部活をどうやって選んだかと思い返すと、あるものから選んだという印象があります。今回のアンケートではそこまではわかりませんよね。

（浅田学校支援課長）

そうですね。この現段階の調査では、分析データとしてはありません。申し訳ございません。

（高島市長）

調理・バドミントン・eスポーツなどの希望が出てきているということは、選択肢があればこうしたことをやりたかったと思っている子たちはいるのだろうということですよ。なるほど。ありがとうございます。

（三宅教育委員）

今の部活の形であれば部活動は１つしかできないと思いますが、興味のある複数の種目や競技を行いたいという生徒が全体の６割いるということで、これから地域展開していくに当たって、そこは可能性として魅力的に伝えていくべきところであると感じました。

（高島市長）

現在、市立中学校では兼部は禁止されているのですか。

（浅田学校支援課長）

基本的には１人１部活の参加になっています。さらに言うと、大会の場合では、複数の競技に出場するということはルール上認められていません。

（高島市長）

認められてないのですか。

（浅田学校支援課長）

中体連の大会の中では認められていません。

（高島市長）

では、選手登録は、自分が出る種目を登録するのですか。
例えば、「私は野球登録」のように。

（浅田学校支援課長）

そうです。例えば外で水泳をやっていて、学校で野球部に入っている生徒が、水泳の選手として中体連の試合に出た場合には、野球には出られないということになっています。

（高島市長）

地域展開の流れになれば、その制度は変えられるのでしょうか。

（浅田学校支援課長）

複数競技を選択できるとするのは、子どもたちの自由度が上げられるという点でいいところがありますが、逆に子どもたちの結果や勝利などの部分は大会でつくるものになりますので、そういったところに活用されると中体連の理念と相反するということは常に説明はされています。

（高島市長）

つまり、スポーツ万能の人を全競技に出せばいいということになる恐れを防ぐということですね。

（浅田学校支援課長）

やはり全ての子どもたちが中体連の体育活動に親しめるよう、そしてその中で心身の成長を図れるような制度をつくるためには、こういった形がいいのではないかという理念で行っていると聞いています。

（高島市長）

地域展開をすると、そもそも全国大会の在り方がどうなるのかといった話もあると思いますが、現状では中学での兼部は禁止されているのですね。

（三宅教育委員）

2つの文化部に入部している子どもはいます。理由を聞くと、やはりいろいろな活動をしたいということでした。

（高島市長）

その場合は部員と準部員というかたちかもしれないですね。

（三宅教育委員）

そうかもしれません。

（浅田学校支援課長）

入部届を提出しますので、中学校の中だけで考えると、そうしたことは無いのではないかと思います。

（高島市長）

そこは運用もあるかもしれないですね。しかし、今の状況では、全体の約6割を占める「興味のある複数の種目や競技を行いたい」という希望は達成できないということですね。そこはある意味で、地域展開のポジティブな側面かもしれないですね。

（極楽地教育委員）

私の娘も、もともとその競技をやりたいわけではなかったようですが、在籍していた中学校で選べる部活の中で、自分がやってみたいと思うものに入りました。そういう子どもが大半ではないかと思います。ただ、平日週4回、土日1回の部活動があると、部活動以外のことをやりたくてもできないという状況もあったので、地域展開がされれば、兼部のようなかたちで、自分でたくさんの居場所がつかれるといったことはポジティブに考えられると思います。

一方で、保護者の目線でいえば、学校外に移動すると安全の担保という点が一番心配です。加えて、バス代などの家庭の経済的な負担が必要になることや、バスが通っていないエリアへの移動はどうするのかといったことも出てきます。また、帰りの時間が18時や19時になり、子どもを暗い中歩かせるということもできず、活動を諦めざるを得ない子どもたちも出てくると思います。そうした移動の際の安全性や経済的な担保は、懸念事項・検討事項の一つだと思っています。

す。

非課税世帯には支援があるけれども、そういった支援がない微妙なラインの方もおられるなかで、その方々を取り残さない、取り残される子どもが出ないような制度設計を考えるべきだと思いますが、全員が取り残されないということは、どの社会でも難しいと思っています。だからこそ、そういった方々にも納得いただけるように折り合いをつけて進めるということが一番大事だと思っています。芦屋市として、これからの2年のうちにできるだけ多くの子どもたち、保護者の方々、地域の方々にお伝えをしていくということが、先ほどの懸念事項でお願いしたいことになります。

（河盛教育委員）

児童の交通手段についてですが、保健福祉センターを通り芦屋病院と南芦屋浜病院を結ぶ定期バスがありますよね。それができるのであれば、市にやる気があれば、中学校間のバスを運行するということも、できるのではないかと考えています。

（高島市長）

ネットワークバスに関しては、始めるときに激しい議論があったようで、簡単ではなかったとは聞いていますが、そういう手段もあるのでは、ということですよ。

（河盛教育委員）

そうですね。

（極楽地教育委員）

今のお話がベストではあります。30分なりの移動時間が生まれるので、それでも活動をしたいという意識の子ども割合によっても、対応は変わってくると思います。

また、国としては受益者負担と示しているので、費用面も懸念事項です。交通費もそうですし、部費も毎月かかりますし、ユニフォーム代なども必要です。今の部活の形であっても、運動部・文化部ともに費用負担が発生しますので、プラスオンでかかるということに対する不安というのは、保護者の方々はお持ちだと思っています。

費用面・安全面、あとは時間の兼ね合いについて、みんなでどうバランスが取れるのかを考える、その部分を取りまとめる専任の担当者は必要かと思っています。

（高島市長）

ありがとうございます。

芦屋市における、子ども時代の最大の格差は放課後にあると思っています。放課後は様子が見えにくいですが、一方では多額のお金をかけて習い事をしている家庭があって、一方では1人でお留守番をしている家庭もあると思っています。格差が見えないというところに最大の難しさがあると思っていますし、見えないから

こそ後回しにされてきた背景があるのではないかと思います。

そういう意味では、部活というのは、ある程度そこに対する一種の処方箋的な役割を果たしていたとも思います。居場所という部分や、体験価値の学びの場みたいなのところでもあったと思うので、それをどう担保していくかというところは真剣に考えないといけません。ある種の大人の事情によって、その価値がなくなることは仕方ない、となるのはよくないと思います。

当然、学校の先生の負担はとんでもないものになっていて、今も残業時間として計上できる時間にはなっていないことなど、この状況を何とかしなければいけないということは思っています。一方で、従来の部活動が担っていた役割をどう担保するかという点と、両方を考えないといけないと思っています。

森田先生に伺いたいのですが、従来の部活動にこの部分の価値がある程度あったということは、みんなが認めるところでもあると思います。教育的な価値があると言われていて一方で任意だということを、どう整理すればいいのかという点が私の中で引っかかっています。つまり、教育的な価値が本当にあって、ある程度いろいろな子どもたちに必要なものなのであれば、それは任意ではなくて教育課程内に置くべき話であると思います。「教育課程外に置いているが、意味があるものである。けれども、みんな何とか任意でやっている」という状況はどう整理すべきなのか。それであれば教育課程内にしたほうがいいのではないかと聞いた話にもなると思います。そこはどう捉えるべきなのでしょう。

（森田教授）

教育課程全体で様々な教科があり、特別活動もあるなかで、仕組みをどう考えるかということだと思います。冒頭にAIのお話もありましたが、学校は何を保障する場なのかという根本のところに立ち返って考えることだと思います。

このまま部活動が無くなったなら、学校が塾化して味気のないものになってしまうのではないかと、というふうに危機を感じている人もいますが、授業をもっと素晴らしくすることや、あるいはクラブ活動をもう一度特別活動の中に入れ込んでみるということも考えられると思います。

過去には、週に1回は時間割としてクラブ活動の時間を設けて、部活動を放課後にやっているという時代がありました。

（高島市長）

小学校ではなく中学校でもあったのですか。

（森田教授）

中高もそうです。小学校でやるような形のものがありませんでした。

しかし、部活動の活動量が多く、成果もたくさん出るし、学校の先生方のアンケートでも「週に1回だと張り合いが無い」などの回答もあり、部活動が熱心になっていったことでその二重状態というのがなくなりました。だから中高はこの20数年前の指導要領で部活動が消えたのです。

最後は代替と言いまして、「読み替えをしてもいい」となりました。課外活動である部活動をカリキュラム内の時間割のクラブ活動に読み替えて活動すること

ができるものとし、部活動での活動をカリキュラム内のクラブ活動とすることを認める運用となりました。カリキュラムの中にあるクラブ活動は、週に1回の活動でも目的を持ち、計画を組んで取り組むはずのものでしたが、部活動をたくさんしているし、子どもたちも喜んでいるし、先生もやりがいがあると思っていたことなどから、部活動への読み替えがされるようになりました。読み替えるのであれば、全員読み替えをしないといけなくなることから、学校として、全員が部活動に加入するというような形にもなっていったところもありました。

そういう意味で、これだけ教科がある中でまた新しく特別活動にクラブ活動を組み込めるかという懸念はありますが、この機会に、特別活動の中に復活できるかどうか、ということも含めた根本的な議論に立ち返る必要があるかもしれないと思います。

（高島市長）

負担軽減は絶対に考えないといけないと思っており、「従来の部活動が形や名前だけ変わって残りました」ということでは意味が無いと思います。一方で、クラブ活動という形でなくとも、特別活動のような話になるのかと思いますが、活動の価値をどう担保するかということは、同時に考えなくてはいけないと思いました。教育長、どうですか。

（野村教育長）

おっしゃるとおり、教育課程がどうだという前に、その意義のようなところで考えると、探究的な特別活動でやりたいことを実現するような時間を設けるなど、個別のカリキュラムに変えていければ一番理想なのですがね。これまでの部活動という概念を一度払拭して、特別活動の中に探究的な学びとして入れていくのであれば、子どもはやりたいことを選べますし、かつそれに向かって進んでいくところを、学校で教科を超えた先生たちが応援したり、時にはゲストティーチャーで専門家に入ってもらったりすることができると思います。13歳から15歳の成長著しい時期に、学校という施設の中でする教育活動としては、価値のあるものになると思います。そういうイメージも持ちながら、地域展開をできないといけないというところでしょうが、現時点でそこを決めてしまうのは、非常に難しいところですね。

（森田教授）

そうですね。

（高島市長）

学校の先生の負担の話に立ち返ると、負担という話はいわゆる「時間外だから」という話がメインなのですか。それとも「やったことのないことを無理矢理やらざるを得ないから」という話なのでしょうか。後者なのであれば、例えば時間内だとしてもなかなか難しいと思うのですが、そのあたりはどういった形の整理ですか。

（森田教授）

昔から継続して挙げられる負担は、専門外のことを要求されて部活動を進めていく、またそのプレッシャーを受けるという点が多かったです。そこにさらに、時間的な負担の問題が顕在化してきました。

（高島市長）

まさにプレッシャーの話は、その結果を求められるという側面があるからということなのですね。

（森田教授）

そうです。

（高島市長）

そうでないのであれば、探究の指導のように、専門でない分野を指導することもあると考えられますね。

（森田教授）

子どものための成果発表の場として、もともとは市単位くらいの規模で成果発表の場を設けていましたが、更なる成果発表の場があればということで県レベルのブロックができ、さらに隣の県ともっと連携していこう、というように規模が大きくなっていきました。その流れの中で、全ての部活動が中体連に属するという形が出来上がってしまったということです。

（野村教育長）

中体連は、100%に近いぐらい教師に支えられていると思っています。現在は種目ごとの連盟があり、それが集まって中体連、全国中学校体育大会、県、そして地区になっていると思いますが、そのあたりは全国的にちょっとぐらぐらしている状態なのではないでしょうか。

（森田教授）

正直なところ、参加の資格のことも含めて、ぐらついていることは事実だと思います。中学生の大会の一つ大きな単位は全国中学校体育大会というものがあって、そこに向けてピラミッド型の構造ができています。

過渡期で新しいクラブがでてきているなか、今までは学校の先生だけの組織でしたので、地域の指導者が指導している新しいクラブが出てきた場合でも、排除しないように依頼するということになっていました。しかし、今後は学校の先生だけでは立ち行かなくなることがはっきりしています。

この組織は先生方が自主的に、ボランティア的に作り上げた組織であって、国がスポーツ推進の政策として作り上げた組織ではないので、国から方針を指示することはできません。ただ、学校の先生だけの組織では立ち行かなくなることもしっかりしていますので、この状況で様子を見ながら、少しずつ縮小を決断していく形になるのではないかと思います。

(野村教育長)

ありがとうございます。

(柏原企画部長)

では次に、「地域展開に向けてのこれまでの市の取組状況、調査経過報告と今後の進め方について」、学校支援課より説明を行います。

(浅田学校支援課長)

ここからは、地域展開の取組についてご説明します。

最初に、本市では令和6年11月まで、本取組の名称を「地域移行」と呼んでいましたが、現在は名称を「地域展開」と改めています。これから出てくる資料では記載が混在していますので、その点を御了承ください。

2ページをご覧ください。芦屋市では、部活動の地域展開を進めるために2種類の会議を開催し検討を進めています。

3ページをご覧ください。令和5年度から6年度にかけて、部活動の地域移行検討会議及び推進会議を合計8回実施しました。会議には、市内中学校体育連盟の校長や保護者代表、また森田先生をはじめとする大学教授などの有識者にご参加いただき、地域展開に向けた課題の抽出と今後の進め方について助言をいただいております。

会議ではまず、4ページに記載している4点を中心に、現状について共通理解を持ちました。

また、地域移行を進めるに当たり5ページに記載している4点が課題として示され、取組の進め方について6ページ目に記載の4点をお示しいただきました。

7ページには、各委員会からのこれまでの意見を踏まえて、教育委員会の所管課で確認した事項を記載しています。

地域移行の時期は記載のとおりです。また、

- ・生徒がスポーツ・文化芸術活動を通して成長する機会をつくること。
- ・生徒が放課後等に過ごすことができる居場所をつくること。
- ・生徒が自らの興味に基づいて選択し、活動する機会をつくること。

という3点を「大切にしたいこと」として進めていきたいと確認しました。

8ページでは、先ほどの確認事項を踏まえた今後の進め方について、改めて委員の皆様からいただいたご意見を記載しています。

9ページには地域展開に向けて、今年度から2種類の検証事業を行った際の案内チラシを掲載しています。

10ページからは検証事業について記載しています。1つ目の検証事業は、現在学校部活動にない競技であるバドミントン・フラッグフットボール・ダブルダッチを取り扱い、地域での活動を実施したものです。2つ目の検証事業は、市内中学校の休日の部活動を、地域クラブとして運営したものです。対象部活動は剣道・男子バスケットボール・男子卓球のそれぞれの中学校のものになり、内容は記載のとおりになります。いずれの検証事業も3月末の時点で関係者より聞き取りを行い、まとめを進めている最中です。

また、他市の取組を報道で知り、いつから部活がなくなるのか等のお問合せが

殺到したことから、小学校５年生から中学校２年生までの保護者の方を対象に、令和６年１２月２１日土曜日に説明会を実施し、現在の取組状況や今後の見込み等についてお知らせをしました。

１３ページからは、市内の小学校４年生から６年生を対象にしたアンケートについてご紹介しています。実施人数は２７３人、回答率は現在のところ１２．３％です。自宅で保護者の皆さんにもアンケート内容を確認いただき、現在実施をしているところです。

１４ページをご覧ください。「中学生になったときに放課後や休みの日に勉強以外にしたいスポーツ・文化芸術活動があるか」についての回答状況です。したい活動が１つ、または幾つかある割合が合計で８３％となっています。

続いて、「今後やってみたいと思うスポーツ・文化芸術活動」についての回答状況です。一番多いのは調理、次に卓球、バスケットボール、プログラミング、バドミントンと続いています。

１６ページは「平日のクラブに参加できる時間帯」についての回答の状況であり、１６時から１７時、１７時から１８時の時間帯の回答が多くなっています。「休日のクラブに参加できる時間帯」についての回答は、９時から１２時が一番多く、次いで１２時から１５時、いつでもという回答も多くなっています。

次に、「クラブの活動場所が進学する予定の学校ではない場所になった場合に通う方法」についての回答状況です。自転車が一番多く、次いで徒歩という回答になっています。「自宅から活動場所までの移動についてかけることができる所要時間」についての回答は、１５分程度が最も多く、次いで３０分程度という回答になっています。

２０ページには、「スポーツ・文化芸術活動に取り組む目的」についての回答状況を掲載しており、みんなで楽しむことを重視するという回答の割合が高い結果となっています。

このような子どもたちの意見も踏まえて今後の地域展開を進めていくために、２１ページに記載しているスケジュールで取り組みたいと考えています。まず、令和７年度５月までに本市における地域クラブ活動に関する方針を策定し、公表します。その後、６月から８月にかけて地域クラブの募集を予定し、９月から１２月頃までに申請のあった団体に対して面接等を行い、認定をしていきたいと考えています。その後も随時２次募集などを行い、令和８年度中に順次中学校における部活動を終了し、地域クラブでの活動をスタートさせていく予定となります。

２２ページをご覧ください。これまでの個々の説明の内容を図で表したものです。地域全体でこれまでになかった種目を含めたクラブを展開し、現在よりも多くの選択肢から取り組みたい種目や参加の仕方を自ら選び、活動する仕組みをつくることで、子どもたちがスポーツや文化芸術活動に継続的に親しめる環境づくりを目指していきたいと考えています。

以上で、担当課からの説明を終わります。

（高島市長）

ありがとうございます。

それでは意見交換ということで、「これまでの展開に対する取組と今後の進め方」について議論いただければと思います。

（河盛教育委）

検証事業のバドミントンについて、アンケートでは希望されているお子さんがたくさんいるようですが、実際にやってみると4人しか希望者がいなかったとのことで、これについては何か分析などされたのでしょうか。

（浅田学校支援課長）

まず、バドミントンを含めて人数が少なくなっているのは、今現在3中学校の部活動がこれまでと同じような形で実施している中で、今回新しい部活動の提案をしておりますので、なかなか現在の部活動から離れられるようなお子さんが少なかったと分析をしています。

バドミントンについても人気はあるが、やはり学校で入部をしているほかの競技を選択している子どもが多いというふうに思います。

（河盛教育委）

場所はどこで開催したのでしょうか。

（浅田学校支援課長）

シンコースポーツ体育館・青少年センターです。

（河盛教育委）

例えば、その参加している生徒の所属する学校や、近くに住んでいる人だけが参加していたのかなど、何かしらのデータなどはありますか。

（浅田学校支援課長）

所属校については、現在お示しできません。申し訳ありません。

ただ1点だけ補足をさせていただきたいのが、人数は4名となっていますが、神戸のお子さんも参加されているので、バドミントンの活動自体は4人以外にも多くの方が参加されています。芦屋市のお子さんは4名ということで把握いただければと思います。

（高島市長）

そういうことであれば、神戸の地域部活動に芦屋の子どもが行く、ということも可能性としてはあるということですね。西宮もしかりですね。私立の学校に通っている子どもも参加できたり、大阪に住んでいても芦屋の近くの学校に通っている子どもは参加できたりするということですね。

（森田教授）

はい。時間の都合がつく人は参加できます。

(高島市長)

なるほど。分かりました。ありがとうございます。

(森田教授)

どこの市町でも、この新しい、ニュースポーツ的なものを設定してチャレンジしていますが、そもそも、既に部活動をしている人や学年に検証をしても、ある程度満足していて、一生懸命やっているから、今はそれ以外に行きようもないんですよね。ですので、例えば小学校5年生ぐらいの次の世代の子どもたちを対象に、先を見越した展開をしておく、そうしたクラブが出来上がっていく可能性もあるかなと思います。

(高島市長)

これは当時の新中1の生徒さんに対しての声かけをしているのですよね。

(浅田学校支援課長)

新中1もそうですし、中学生皆さんに声かけしています。正確に言うと6年生の3月頃に、こういった取組をしますよという紹介をしています。

(高島市長)

なるほど。でも新中1の生徒さんは、自分の通う中学校にある部活と地域のクラブどっちにしようかとなり、それは学校の部活動があるからそちらを選んだということですね。ということは、最初に言ってくださった移動の話が非常に関係しているということの証左ではあるかもしれないですね。

(極楽地教育委員)

移動や、移動手段の安全性は、子どもも保護者も気にされているように思います。

(高島市長)

そういうことですね。これが学校の中だったら、もっと増えたということはあるかもしれないですね。

(三宅教育委員)

先生の最初のお話を聞かせていただいて、結局もう現行の部活というものから全く発想を変えないと、安全などの観点が問題にならざるを得ないなと思っています。学校の先生の働き方改革や、子どもの数の減少を踏まえて、現行制度が成り立たず地域展開しなくてはいけないとなったときに、課題を上回る魅力的なものであることが必要だと思っています。

フランスで公立小学校の先生をしている友人がいて、その方の授業を1日、子どもの横で受けたことがあります。そのときは地域の施設のオペラ座と連携して授業をされていました。その休み時間に、1年生の子どもが「オペラ座はとても魅力的で、すごいところだ」ということを夢中になって話してくれました。それ

を踏まえて、「部活」という概念を一回外して考えて、芦屋にあるもので、子どもたちを巻き込んで魅力を発信できる施設があるかと思ったときに、高浜虚子の虚子記念文学館が思い浮かびました。俳句はフランスでもメジャーになっており、うまく子どもたちを巻き込んで、そうした日本の文化を継承していつてくれる子どもを、芦屋でも育てられるのではないかと思います。

また、海洋体育館ではヨットやカヌー、サップもできるので、マリン部のようにしてそこと連携してできたらいいと思います。中学校からそのように取り組んでいたら、ヨットの吉岡選手のように芦屋からオリンピック選手が出てくる可能性もあります。施設との連携によって地域展開というものを魅力に変えていき、「芦屋ならではの、地域で子どもたちを育てていくもの」として、学校も伴走して何かができる、魅力を伝えられるのかなと思いました。

会下山遺跡も山手中学校の生徒が発見したということもあります。部活というくくりではないかもしれないですが、文化財についてのこれからの担い手を育てていくというような展開もできたらいいと思います。

学校の施設を使うだけでなくいろいろな施設で取り組み、魅力的な情報をもっと発信していく必要があると感じています。

（森田教授）

本当にそのとおりだと思います。そういう意味では、クラブ活動というものもあっていいですが、地域でいろいろな活動をするのが良いと思います。大人を対象としている教室のようなものから発展してもいいと思いますし、例えば地域で行ってきた太鼓の伝承をもっと広く行うとか、素敵なホールを持っているからこの機会に子どもたちの合唱団のようなものをつくっていこうといった形でもいいと思います。

今おっしゃった地域の資源の再度の掘り起しは絶対に必要だと思いますし、それは視点として絶対に入れておいていただけたらありがたいと思います。

（三宅教育委員）

すでにそういうことをされている市はたくさんあるのですか。

（森田教授）

兵庫県でまだそこまで前面に出ているところはないですが、eスポーツに関しては、播磨町では民間の方が手を挙げられて、大人から中学生の子どもも入ってやっているところも出てきました。

先ほど申し上げた掛川市は、生涯学習のまちという前提がずっとありましたので、市民自体が「大人から子どもまで生涯学習で学びを」という意識をもっており、様々な可能性があったので、受益者負担の事も含めて比較的スムーズに進んでいた印象です。

この機会に、地域の資源についてもう一度点検されたらと思います。

（高島市長）

調理の人气がこれだけ高いのであれば、芦屋には料理人の方もたくさんいらっ

しゃいますからね。そういう地域の巻き込みのような、地域連携が大事だということですね。ありがとうございます。

（浅田学校支援課長）

先ほどの実証実験について、バドミントンに参加していた生徒の所属校の内訳がわかりました。山手中学校のお子さんが3人、精道中学校のお子さんが1人の4人です。

（高島市長）

山手中学校は校区も広いということもあるかもしれないですね。ありがとうございます。開催は土日でしたか。

（浅田学校支援課長）

土日です。

（高島市長）

土日だからということはあるかもしれないですね。分かりました。ありがとうございます。

（河盛教育委員）

せっかくアンケートをしたということは、少なくとも上位のものについては実施される予定なのでしょうか。

（浅田学校支援課長）

取り急ぎ、まずは子どもたちの希望を取ってみるというところでした。ただ、様子はよく理解できましたので、今後の検討にさせていただこうかと思っています。

（極楽地教育委員）

抽象的なことばかりで申し訳ないのですが、三宅委員や市長が言われるように、社会教育・まちを挙げての取組として進めることは本当に必要で大切なことだと思いますし、目指すべきところではあるとおもいます。

ただ、現実の部分も置いてはいけないところかと思っています。部活動は非認知能力の形成や、先輩・後輩・縦横のつながりを作る機会であるなど、人格形成に関するベースとなる部分もあると思っています。それがなくなることに対して懸念を持っている方はたくさんいらっしゃるって、大人の意識を変えることが本当に難しいと思います。市長・教育長も言われたように、対話や探究というところをしないといけないとは思いますが、なかなか働かれている方々にはそういう情報が届かないと思います。高校ではまだ部活動が盛んにありますので、今後高校に接続するに当たって、中学校の部活動を高校でも続けたいというお子さんもいれば、新しい部活を始めるお子さんもいるでしょうし、接続のところも考えないといけないと思います。また、大学を卒業して社会に出たら、「組織としての考

え方」というものはどうしても存在すると思っており、そのことを転換する覚悟が必要だなというふうに、今日のお話を聞いて思いました。

（高島市長）

１点伺ってもいいですか。例えば、共働き世帯・ひとり親世帯などいろいろあると思うのですが、部活がなくなるというイメージの中には、子どもが早く帰ってくることに関する不安もあると思います。そこは結構大きいですか。

（極楽地教育委員）

それもあると思います。ですが、子どもが中学生になると共働き家庭が増えるように思いますので、子どもの帰りが遅くなることへの不安があると思います。現在の部活も夏場は帰りが１９時頃になり、不安ではあるので、連絡をしている方も多いと思います。

（高島市長）

どっちもということですかね。

（極楽地教育委員）

子どもが何をしているのか、どこにいるのか見えないというところに、親は不安になると思います。

（高島市長）

少なくとも部活をしているから学校にはいるだろうと思っているけれど、そこがなくなると、うちの子はどこにいるのだろう、みたいなことですね。

（極楽地教育委員）

そう、居場所ですよ。子どもが家でゲームばかりしているのではないかと、どこに行っているのだろうということを心配するご家庭もあると思います。できるだけ、今の子どもたちが過ごせる居場所があるということで、子どもも大人も安心感を持っていたきたいと思います。

また、嫌なことだったり、友達や先生と価値観が合わなかったり、そういったことを経験して成長していつているので、その辺りの非認知能力のところは、社会教育とともにみんなで守っていかないといけないのではないかと考えています。

（高島市長）

まさに、学校は成長するためにあるということですよ。

（極楽地教育委員）

そうですね。本質のところですよ。人としての成長。子どもはもちろん、子どもを中心に大人が成長する場でもあると私は思っています。

（森川教育委員）

これから地域クラブ活動を開始するという計画で、いろいろ進められると思います。受皿となる地域クラブ側も、「水平移行する訳ではない」といった点についてまだ誤解をされている方もいると思いますし、ご不安もあると思います。地域移行検討会議の中でも、その体制の充実を求めるという意見も出ているようですが、その委員として、受皿となる地域クラブ側の方も参加いただくということがあっていいのかなと思っています。その辺りはどのような議論になっているのか、お聞きできたらなと思います。

（高島市長）

この推進会議の中に、受け手側の方はいらっしゃいますか。

（浅田学校支援課長）

推進会議には保護者の方が入られていて、その方に地域としてのご意見をいただいているのですが、受け手側の方はいらっしゃいません。

一部の受け手の方のご意見を参考にしてしまうと、その方にとっては受け入れやすい条件になりますが、それが一般的に多くの方に受け入れられるようなあり方にはならないのではないかとということがあり、まずは一般的な形でご意見を伺いたかったということがありました。

次は、どのような形で募集をするかなどについて市としても検討するなかで、受け手側となる方にご意見をいただくことが望ましいかどうかの検討が必要ではないかと思っていますが、今は子どもたちに関わる保護者の方、学校の先生方、有識者の方にご意見をいただいて検討を進めている段階です。

（森川教育委員）

今までは、制度設計といった段階だったかと思いますが、今後はそういったところも入っていくのかなと思ったので申し上げました。

あともう1点、地域クラブでの活動になると、保護者とその地域クラブとの契約に基づいて活動を実施するということになってくると思います。その中でいろいろな契約が生じてくると、契約自由の原則があること等により、今までの学校部活動で確保されていた参加のしやすさなどについて、契約であるために融通されない場合などが出てきたりすると、その確保が難しいことがあるかもしれません。そのため、そういったところをどのように担保していくのかといったことが重要ではないかと思っています。

いじめの問題等も当然関係してくると思いますし、その対策はこれから十分に考えていかれると思いますが、そういった点も検討していただければと思っています。

（高島市長）

ありがとうございます。確かに、契約自由の原則がありますものね。その点について、先行自治体でうまくやっている手法はあるのでしょうか。

（森田教授）

一つは、受皿の募集をして、体制などを含めたある一定の条件の中で認めた団体に、公認や認定のようなものをつけて活動いただいているところもあります。そして、望ましくないことが見えてきた場合にはそれを取り消す等の運営です。

そうなった時にどの立場からそういった処理・判断をするのかということになりますよね。それは、市の窓口となる部署が当面の間は担うとする形か、もしくは委託した運営団体のようなもの、例えば総合型のクラブ等が引き受けるという形になってくるかと思います。

（高島市長）

いずれにしても市の公認になるのですね。

（森田教授）

そうです。それはそうなると思います。

（高島市長）

分かりました。今日改めて思いましたが、移動の話を含めて、現実として見たときに課題はいろいろあると思います。そして、これまでの学校の部活への関わりには「運営者としての学校」と「場所としての学校」という2つの関わりがあると思っており、これらを分けて考えないといけないのではないかと改めて思いました。

先ほどのバドミントンの4人という数値も、今部活がある状態だということもありながら、やはり「移動」に対する心理的な抵抗はあると思うので、そこをどうするかということは考えないといけないですし、他方では、活動の場所として学校が使えなくなるわけではないと思うので、学校という場所をどのように使って実施していくのかというところは、教育委員会と市長部局が一緒になって考えていくところではないかと思いました。

運営については、従来のやり方を継続するのは難しいということとも言えます。仮に、先ほどの公認や認定を誰がやるのかということになれば、極楽地教育委員のおっしゃった、コーディネーターのような役割の課などが必要だという話にもつながるでしょうし、そのあたりの体制整備は教育委員会の中での調整になるかと思いますが、令和8年度からとなればもうあと1年ですので、スピードを上げてやっていく必要はあると思いました。

森田先生、最後に、今後のその市としての方向性というところですけども、原案的なものはこの最後のページの1ページにありますが、この辺りについて、先生からご助言などはいただけますでしょうか。

（森田教授）

やはりこれから、ビジョンに向けた協力を得るための募集・公募は必要だと思いますが、同時に、今までお付き合いのあった団体などに個別にアプローチすることも必要だと思います。芦屋市も都市部ですので、公募をすると神戸市のように予想以上の数が集まってくるとは思います。各担当課が把握しているような、

芦屋の地域の中で根を張った活動をされている方々に丁寧に説明をしながら、協力を得て進めていく必要もあると思います。

これまで、社会教育・生涯学習は各自の自由な趣味の範囲で活動してきたと思いますが、今まで大人だけでやっていた団体に中学生が入るなどの形で、門扉を広げてもらうこともいいと思います。新たに立ち上げるというのもいいですが、今まで大人がやっていた、あるいは小学生までがやっていた活動に中学生を受け入れてもらうなど、対象を広げていただけたらいいと思います。

地域の中で根を張った活動をされている方々の状況等はお分かりだと思うので、そこにもぜひ積極的にアプローチいただけたら、十分進めて行けるのではないかと思います。

（高島市長）

ありがとうございます。今後、教育委員会のほうでもどんどん進むと思いますが、今日何度もお話がありましたとおり、この取組はまちづくり全体の話であり、生涯学習というところを考える上で、ある意味大きなチャンスかと思っています。もちろん中学生のためにということは大前提で、そこが一番大事なのですが、同時にいろんな世代にとっても大きなチャンスだと思いますので、教育委員会だけで閉じることなく、市長部局とも密な連携を取って、情報共有も含めてしっかりと進めていただければと思いますので、よろしくお願いします。

同時に、子どもの声を聞くということはとても大事だと思います。恐らく、少なくとも今後10年以上は続く大きな制度設計に関わるということでもあると思いますので、ぜひ今回のように、今の中学生や、今後中学校に入る子どもたちにもアンケートを取って、その声をしっかり聞いた上で一緒に考えるということも、引き続き進めていただければと思いますので、よろしくお願いします。

（柏原企画部長）

ありがとうございます。本日予定されていた議題は以上となります。

続いて、議題3「その他」です。教育委員会教育統括室管理課より、来年度設置を予定しております学校教育審議会について、簡単に説明をさせていただきます。

（長岡管理課長）

この場をお借りしてご報告をさせていただきたいと思います。資料はございませんので口頭でご報告をさせていただきます。

現在も、少子化の進展が非常に進んでいます。また、社会情勢が大きく変化する中で、保幼小の連携の観点からも、全ての就学前教育・保育の質をどのように向上させていくのかが問われているところです。

一方、市立幼稚園の園児数は継続して減少している状況であり、園運営についての課題も生じているところです。

そこで、就学前教育・保育施設の現状と、市立幼稚園に求められる役割等を踏まえた適正配置と今後の運営について、4月以降、来年度の学校教育審議会に諮問し、議論をいただく予定としています。

大まかなスケジュールとしては、5月に教育長から諮問案の提出、以後、5回程度の御審議をいただき、年度内に答申をまとめていただく予定です。委員の委嘱や諮問内容については、4月以降の教育委員会に諮らせていただくことになります。また、審議を進めるに当たり、市長部局・関係課とも連携するとともに、適宜、この総合教育会議の場でもご報告をさせていただく予定です。

（高島市長）

分かりました。市長部局との連携も入れると思いますし、就学前教育というところでは市長部局も関わりがありますので、ぜひそこはよろしくお願いします。

（柏原企画部長）

その議題も合わせまして、また来年度大きなテーマがありますので適宜開催をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは最後に、教育長から一言ご挨拶いただきます。

（野村教育長）

今日は本当に熱心なご議論をいただきありがとうございます。森田先生もありがとうございます。

学校部活動でいきますと、私も部活をしてきましたが、本当に長い間、学校教育という枠の中で、教師の献身的な取組に支えられて、土日も惜しまず、お盆休みも返上で活動をしていました。恐らく、こうした状況は世界的に見ても日本ぐらいでしょうか。そうして文化的にも放課後を支えてきたわけです。しかし、その「当たり前」をこのたび転換しないといけないということです。そのうえで、放課後の体系をどのように保障してあげるかを検討しないといけません。

もう一つは、先ほどのアンケートにもありましたが、自分の時間が欲しいという子どももいて、それを認めてあげないといけないということがあります。それが今回の転換を進めていくに当たっての大人側と子ども側のずれかもしれないと思っています。部活で勝たせたい先生、上達させたい監督・コーチに対して、アンケートでは、子どもたちはみんなで楽しむことを重視しています。現在、このずれが起こっているように思います。

そこで、先ほどの市長のお話にもあったように、当事者である子どもの声を大事にしてあげたいと思います。私どものほうで仕掛けていきながら、大人も中学生も一緒に巻き込んで、どのような活動を保障してあげるかということを考えていきたいと思っています。

それぞれの経験等も多種多様ですので、この整理が難しいというのは、どこの自治体でも壁になっていると思います。一つ一つそこを対話をしながら解消していきたいと考えています。あわせて、特に中学生たちのやりたい・やってみたいという気持ちや、やりたいことはないけれどもみんなとだったら何かやってみたい等、そういう所属欲求のようなものもあると思いますので、アンケートや場の設定などを検討して、私たちがリードしていく必要があるのではないかと思います。

最後に一言、F C 今治高校の岡田学園長さんはこのようなことをおっしゃって

います。勝つチームには一体感があると。ところが、一体感をつくろうとすると失敗すると。一体感が目的になったら駄目だということです。裏を返せば、一人一人が役割を果たすことが結果として一体感になるということなので、一人一人が役割を果たすということがすごく大事です。

では、私たちそれぞれにはどのような役割があるのかということを考え、当事者意識を発揮する子どもたちにとってのモデルにならないといけないと思います。そういう意味で、対話を仕掛けるであるとか、今日も原義を問うというお話がありましたが、まさにそもそもその活動にはどのような意味があるのか、どのような活動にしたら意味があるのか、または学校は何をすることなのか、ということもしっかりと対話した上で活動をしていかないと、痩せ細った活動になりかねないなと思っています。

いわゆる地域展開が目的になってはいけないと思っており、「それぞれがやりたいことは何なのか」ということを出発点にしないと、まさにまちづくりにもつながっていかないと思っています。まずは何をやってみたいのか、あるいはどんな活動でトライしてみたいのか、その子どもたちの気持ちを応援する大人の側の主体的な姿勢も見せていけたらと思っております。

本日は長い時間となりましたが、ありがとうございました。また今後ともよろしく願いいたします。

(柏原企画部長)

ありがとうございました。

本日の会議録は、作成次第その内容を各委員に御確認いただきますので、引き続きよろしくお願いいたします。

次回の開催については、協議事項が整いましたら、改めて日程調整をさせていただきます。

以上をもって本日の会議を閉会といたします。ありがとうございました。